

# 「軍隊を捨てた国」から「持続可能社会」へ

コスタリカはヒントの宝庫だという  
コスタリカの研究者で民間外交に携わる

## 足立力也さん

日本からは地球のほぼ反対側、中米にある小さな国・コスタリカが静かな注目を浴びている。それは平和憲法を捨て戦争ができる国に変えようとしている現政権が長期間支配している日本に対し、軍隊を捨て外交によって長年平和を保っているコスタリカが対照的だからだろう。今回はそんなコスタリカの研究者である足立さんにインタビューさせていただいたが、コスタリカですでに軍隊を捨てたというのは過去のことで、今はもっとその先に進んでいるというお話だった。長期的な視点をもって持続可能社会に向かって進んでいるコスタリカの政策は、地球・人類がどうやってこの先も生き延びられるのかのお手本を示してくれている。我々のような「後進国」も戦争への道を止めるだけでなく、未来の地球社会の一員となれるよう広い視野を持ちたいものだと思った。

(あ)



— コスタリカに初めて興味を持ったのはいつですか？

●それは中3の社会の授業です。憲法の平和主義の説明でコスタリカについての新聞記事が出てきて、軍隊がないということについてコスタリカの人達が何と言ってるかという、軍隊をみんなが持つから、お互い疑心暗鬼になって、それがエスカレートして戦争が起きるんだと。だったら軍隊を持たなければ戦争が起きない。むしろ軍隊を持たないことが最大の防衛力だというふうにコスタリカの人達はみんな言っている、と書いていたんです。で、それに非常にひっかかったんです。

なぜかという、まず第一に、当時は1980年代で冷戦時です。冷戦というのは抑止論で説明されていたもので、両方の軍事力のバランスがとれていたら戦争は起きないと。ということは軍事力があることが前提なんです。だから軍隊を持たないということになると、抑止論自体がもう成り立たない。でも現実世界では米ソというのがあって、コスタリカだけで生きていけるわけではないし、ましてコスタリカは西側世界の国なんです。要するに親玉に楯突くようなことを言ってしまうとつぶされないということ自体が

非常に特殊でおかしなことなんです。だから嘘をついてるのか別の真実があるのか、どっちかしかない。

二つ目はコスタリカがあるのは中米地域で、当時1980年代というのは7つの国があったんですが、どこも内戦中か軍事政権かで血なまぐさい地域なので、一国だけ軍隊がないというのは現実味が無いというか疑問に思った点です。なおかつ、もしその情報がほんとだとして、なぜその情報が全く世の中に出ていないのか。ニュースバリューが高いと思ったんですが、コスタリカに関しては誰も何も言わない。軍隊がなくていいじゃないって国があるなら注目されてしかるべきなのに、なぜ誰も知らないし何も言わないのか。それに軍隊がないのがいいと“誰もが言う”というのも非常に特殊なことなんです。政治的課題というのはどんなに偏っても7対3とか、どんなに極端になっても8-2とかなのに、誰もがそう言うというのはほんとなのか、ほんとだとしても実際には8割なのか9割なのか、というところに疑問を感じさせる話だったので、ひっかかっていたんです。ただしよせん14才の子どもなので、その時なにかできるわけでもなく、そのまま時が流れていったんです。

その後、大学生のとき、1年だけカナダのバンクーバーの大学に行っただけです。すると冬休みが1ヶ月ほどもあって長いので、せっかく太平洋を越えたのでどっか行こうかと思ってる、たまたまコスタリカへの安い直行便のチケットを知ったんです。その時に、ほぼ忘れかけていたコスタリカのことがふっと思い出されて、14才のころに一生に一回くらい行ってみたいと思っていたんですけど、一生に一度というのは今だに思っていてとりあえず行くことにしました。それは単純に観光旅行でなんの当てもなかったんですが、コスタリカの街中をふらふらしていたときに酔っ払いのおっさんがいて、さんざんからんできたあげく、その酔っ払いが入って行った建物が国会だったんです。それで酔っ払いが入れるのなら観光客でも入れるだろうと思って守衛の人に入れてくれと頼み、何度か断られたんですが6回目にアボがとられて案内してもらって見学したんです。

その対応をしてくれたのは大統領秘書官で、質疑の時間があってベーシックなところからコスタリカの基幹産業はなにかを聞いたんです。そうすると一次産品の輸出と観光だと。そこでまた僕はん？と思ったんです。というのはふつう観光が国の産業の重要な部分を占め



↑ツアーではコスタリカのローカルな人たちとの交流も盛りだくさん(提供:足立力也)

ているとしたら、首都とリゾート地には必ず五つ星クラスの世界的なチェーンのホテルがあるはずですが、当時のコスタリカ首都のサンホセにはせいぜい三つ星のホリデーインがあるだけだったんです。それで、観光がメインというわりに大きなホテルがないのは何故なんですか？と秘書官に聞いてみると、外資を導入して大きなホテルを建てたらどうなるか考えてみなさいよと。そこには例えばカジノが入ります。カジノが入るとそこの利権にからんでマフィアが入ってきます。マフィアが入ると麻薬と一緒に入ってきて、青少年に広がってろくなことにならないと。なんでもそこそこが一番いいんだと言うんです。

そこが私が最終的に引っかけたポイントで、要するに大統領秘書官というと政府の高官ですが、そんな人が別に経済成長をしなくてもいいと言ったんです。それは政治の世界の常識ではありえないことなんです。そんなことを言ってる政治家とか政党は聞いたことがない。たとえば日本でいうと、自民党から共産党まで、政策、主張、イデオロギーと、ありとあらゆるものが違うけれど、どの政党も経済成長はしなければならぬということでは完全に一致してるんです。それが3%なのか1%なのかという違いはありますが、少しでも前の年に比べてGDPをあげなければならないというのは全部いっしょです。でもコスタリカの大統領秘書官は、そうじゃないと。なんとなれば下がってもいい。GDPが上がることによっているんな弊害が出てくるくらいなら、別にあげなくていいと言ったわけです。

で、ポイントはそこだと思ったんです。軍隊がないとかいろいろあるんだけど、それを突き詰めてもなんにも出てこない。むしろコスタリカの人達が持っている価値観。この人達が何を大事にしているかがわからず、軍隊がないという制度論だけ語っても、ただの上物にすぎない。真実はそこにはない。その時、そういう入り口をまずもらったんです。これはコスタリカのことをもう少し調べる必要があると、はっきり認識したのがその時です。

その時気が付いたことのポイントは価値観であるということで、その価値観を理解するためには、机の上でいくら本を読んだって理解できない。人の頭に入ってることで、しかもえらい人とか学者とかではなく、そのへんでコーヒ一飲んでるおっさんとか、市場で野菜を売ってるおばちゃんの中に入ってるか、そういうものの集合体の正体をつきつめていかなければならないんです。

## (2) 名前のない新聞 No.209 / 2019年1・2月号

では人間の頭の中をどうやって覗いていくかという、自分もその一人になるしかない。つまり現地に行って、自分自身がコスタリカ人化する以外に理解できないんです。

それで学校はとりあえず卒業して、コスタリカに2年間滞在できるだけの目標額を設定して働き、目標額に達した瞬間に辞表を出して、現地に2年間住んだわけです。

### ■コスタリカ人の頭の中にあるもの

そうやって2年間コスタリカに住んで、ある程度の中間報告的な結論は出てきました。

コスタリカの人達が一番使う言葉というのは「PURA VIDA (プラビダ)」、英語に訳すと「PURE LIFE」、純粋で素朴な生活とか人生という意味なんです。この言葉は挨拶だったり、呼びかけ、雄叫び。挨拶も出会いの挨拶でもあるし別れの挨拶でもあるし、なんでもそれなんです。要するにありとあらゆるポジティブなこと、いいことがそのプラビダ、純粋な人生、素朴な生活という言葉で表してるんです。ということは、コスタリカ人の価値観、彼らがもっとも魅力あると感じることは素朴であることで、複雑なことはあんまり好まない。単純でシンプルなのがいいわけです。で、軍隊があった方がいいかというのもその価値観の上に成り立っている。軍隊のこともそうだし、最近でいうと再生可能エネルギーでほぼすべての電気を作ってますし、環境保護も国土の1/4以上が自然保護区で、もう葉っぱ一枚石ころ一つそこから持って帰れないという徹底した自然保護をやっているし、人権問題に関して、人権問題にかかわる訴訟のみを取り扱う法廷があるし、それになんで経済成長をがたがたしないのかとかも全部ひとつながりになってくる。純粋で素朴な暮らしがいいじゃないかというところにつながってくるんです。

でもそういう価値観をみんなが共有してはいても、それを実践に移してるかという別の話なんですけど、ではどのあたりでその価値観が制度に結びついていてどのあたりが乖離しているかを切り分けていく作業が必要になってきます。それに日本人としては、そのあたりのどの部分が日本の社会にとって参考になるかを自然と考えるんですが、少なくとも制度の移植というのは簡単にはできないので、どういうヒントになりうるのかという分析をそこからしていくわけです。

それで日本に帰ったのは2001年なんですけど、そのころコスタリカのドキュメンタリー映画「軍隊を捨てた国」の制作が始まっていましたが行き詰まっていた、というのはスタッフが誰もコスタリカについて知らないんです。何しろ知らないものを撮らないといけないので、何を撮ったらいいかわからなかった。当時はインターネットの黎明期でしたが、僕はコスタリカに行く前の仕事がシステムエンジニアだったので

個人的にも使っていて、今でいうブログみたいなのをずっと書いていたんです。コスタリカ滞在日記みたいなのを、で、帰国した当時、コスタリカというキーワードで検索すると6件しかヒットしなかったんです。それで映画のプロデューサーの早乙女愛さんが検索したら私のブログが出てきたので、連絡してきて協力することになりました。台本に手を入れたりいっしょにロケに行ったりして、帰ってきたらちょうど911が起これ、この映画が目目されるようになったんです。自主制作のドキュメンタリー映画としては異例のヒット作になり、その影響で本を出すことになったり、それがまた8刷までいって高校の教科書にまでなってる、そんなこんなでコスタリカの話をしてくれという依頼が来るようになったので、もう忙しくて働けなくなってしまった。そうならしょうがないので、それで食っていくしかない、という延長線上に今います。なので、やってることは好きなことなんですけど、仕事として選んだつもりはなくて、気が付いたら流されてこうなったということなんです。

### ■コスタリカへのツアーを主宰

今はだいたい年に二回、コスタリカに行ってますので、もう30回は行ってると思います。で、一回の渡航につき短くて2、3週間くらいは滞在して、その時その時で新しいテーマだったり以前のテーマを深めたり。今まで行ったことのないところに行って、コスタリカの新しい側面を探したりしてます。

——ツアーを募集されてますが、どんなところに連れて行かれるんですか？

●はい。そのツアーがだいたい年に2回あって、次は2月です。それと夏、8月に毎年企画してます。

ツアーは2つのパートに分かれていて、1つは首都サンホセ近郊の公的機関、たとえば国会だとか病院とか学校等々に行きます。そこではシステムの話聞きつつ、そのシステムを支えている方や実際に働いている人達が何を考えているか、たとえば医療や福祉はどうなってるのか、あるいは国会や政治はどうあらねばならないかを、働いている人達と話すことでわかってくる。もう一つはエコツアーもしくはローカルツアーです。コスタリカの場合、平和だとか人権だとか民主主義というテーマに関して、国のど真ん中のたとえば国会の広報の人が言うことと、田舎でほぼ自給自足の農業の暮らしを生まれてからずーっとやってるじいちゃんと言ってるのが、どういうところが一緒でどういうところが違うのか、というのを比較していかないと、街中の人の声だけ拾ってもわからないんです。どこまでその考えが国全体に共有されているのかは田舎の方に行かないとわから



## 名前のない新聞 No.209 / 2019年1・2月号 (3)

ないし、田舎だけでもわからないので両方ですね。

— どんな人が参加してるんですか？

●現地では5日くらいですが、往復に時間かかるので全体では9日間かかります。そしてツアーの料金はだいたい40万くらいです。それだけの時間とお金を用意できる人という、だいたい年金生活者なんです。たまに学生さんとか若い人も来ますけど、数としては少ないです。それは個人参加ですが、たまに弁護士やカトリックのグループ、あと議員のグループなど団体参加というのもあります。たくさんの人に来て欲しいですけど、やっぱり若い人に来て欲しいです。

これは一つの民間外交で、オフィシャルな外交とは別に民間でつながるのはすごく重要です。日本人にとってコスタリカはヒントの宝庫なんですけど、日本は傾いてるとはいえコスタリカに比べればぜんぜんリッチな国ですから、日本人が助けられることはたくさんあるので、そういうところの橋渡しをしたり、学問研究の分野でもたとえば環境教育で手を結んだり。組織対組織もそうですけど、やっぱり個人と個人ですね。それが大きければ大きいほどシナジー効果が出てきますし。

— ツアーなどの他に今新しくやろうとしていることは何かありますか？

●いま次の本を書いているところです。ハーバードビジネスオンラインというネット媒体に「持続可能国家」という連載を書いています。環境・エネルギー関係の内容を一つの本にまとめようと思っています。

### ■軍隊がないというのは終わった話

●コスタリカの中では、軍隊があるとかないとかはもう結論が出て、議論としては終わった話です。あとはただそれを淡々と続けていくだけ。生物多様性の重要性についても結論は出ています。あとは実行していくのみ。

じゃあ次は何なんだという、課題として今一番大きいのは持続可能性なんです。第一にカーボンフリーな電気で100%発電すること。これはほぼ達成してるんですけど、もう少ししっかり安定的なものにすると。第二に、化石燃料をまだまだ使ってます。たとえば輸送部門だったり産業部門だったりいろいろあるので、それを含めてカーボンニュートラルにすることがコスタリカの直近の目標です。要するに排出と吸収のプラスマイナスが計算したら0になりますよというのを指す。第三に、脱化石社会を目指す。化石燃料を使わない、炭素を排出しないというのを指していくというのが次の長期目標です。

その点でコスタリカがやっていることを追いかけるのが私の今の仕事です。

— 化石燃料を使わないという、具体的には太陽光とか風力でやってるんですか？

●水力が基本で、地熱がいわゆるベース電源になっていて、その上に風力をかぶせるというマトリックスです。太陽光はほとんど使いません。

— それはどういう理由で？

●コスタリカとしてはあんまり意味がない。大規模発電所としての太陽光はそんなにうまくないんです。経済性もないし、自然環境の問題があるし、廃棄物の問題もあります。

分散型で各家庭の屋根の上にパネルを乗せるといういわゆるスタンドアローンの小型のものだったら意味はあるだろうと。だけど大規模な装置としての太陽光というのはそんなにいいものではないと彼らは思ってます。で、実は日本政府から無償供与された小さな太陽光発電プラントがいちおうあるんですけど、くれるって言うからもらうけど、買うつもりはないと。しょうがないからそこに管理人を一人おいてまわしてます。やる気はないんです。

基本的に今開発してるのは地熱と風力です。地熱は国が主導して開発していて、風力は国営企業もやってるけど民間企業が主にやっています。それもすごい勢いで増えています。よく地熱にしても風力にしても、日本だけでなく海外でも開発に伴う環境問題が言われるんですけど、コスタリカに関してはほとんど問題は起きていません。環境に対する悪い評価が起きない形で進めています。

地熱発電所で最初にできたのは日本製の機械ですね。それも東芝と三菱と日立とそれぞれ違うメーカーのを入れているんです。その他にもイタリアの発電機やフィンランド、オランダのものも入れています。それもみんな援助がらみなんです。日本だったらODAで援助が来て、そのかわり運営権というのを日本だと丸紅が15年間もっていたんです。でも15年たったら譲渡すると。地熱は配管以外のメンテが比較的容易なので長持ちするんです。なので15年間は利益を持って行かれても、そのあと残るなら得なんです。で、日本は日本で15年間儲けられるので、ある意味WIN WINな関係でやっています。

そして、コスタリカの21世紀前半のあるべき社会の姿はこういうものだというビジョンがはっきりしていて、それはエネルギー的、環境的、気候的に持続可能な社会ということで、明確なんです。人口増と経済発展で、炭素の排出量自体は増えてるんですけど、現在は吸収でそれを相殺するというふうにして、2030年をピークにして、そこからは排出量そのものを



減らすという目標をたてています。今からいうと12年後なんですけど、それだけ長期スパンを見て、そこから減らす為の準備をこの10何年間かけてやるという計画をたてています。それで2050年までには0にするというプランで、30年計画をたててるんです。

— それは一人の偉い大統領がいて考えたということではなく、みんなで話し合ってるって決めたわけですか。

●それに反対する人も当然いるんですよ。たとえば経済界はどこの世界でもそうですね。

で、そこと時にはバトルをし、時には折り合いをつけ、時にはあなあって裏取引もするんですけど、コスタリカが面白いのはそういう汚い話もひっくるめて最終的にはいい方に落としてるってところなんです。ふつう汚い話しかからむとだいたい悪いところに結論が行くんですけど、コスタリカでは軍隊の話でもそうですが、理想や建前で大事とされるものを達成できて。そこが、この人達は面白いと思うんです。そしてそれはすべて人の所業なんで、そういう意味では他の国の人間ができない道理はないんです。要するに意志の問題と合意の問題です。やる気を持った人間が、合意ができるレベルまで、その社会の中でマジョリティを占められるかということです。

↑11月に西宮で開かれた講演会で「コスタリカに学ぶ平和のレシビ」というテーマで話す足立さん。

## INFORMATION

・足立力也公式サイト

<https://adachirikiya.com>

足立力也の事業、著書、コスタリカツアーの紹介など。

・足立力也がガイドするコスタリカツアー

2/4～2/13 428,000円

お問い合わせはマイチケット

[info@myticket.jp](mailto:info@myticket.jp) (担当岩井まで)

※書籍は多数有ります。詳細は上記サイト参照。

